

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	藤井 真聖（奈良県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第79号
学位授与の日付	平成27年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第2項
学位論文題目	<i>Tattvasaṃgraha (pañjikā)</i> , śabdārthaparikṣā の研究
論文審査委員	主査 森山 清徹（佛教大学教授） 副査 松田 和信（佛教大学教授） 副査 赤松 明彦（京都大学教授）

〔1〕論文の概要

本論文はシャーンタラクシタ *Tattvasaṃgraha* (TS)（真実綱要）第16章、言葉の対象の考察(śabdārthaparikṣā, 以下 ŚAP) 章、それに関する弟子のカマラシーラの注釈 *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) と共に全訳を施し、それに基づく研究である。そこで明らかにしようとしたことは、縁起を立てる仏教学説に対して、外教と呼ばれる諸哲学学派は、実在論の立場から、仏教学説を様々な形で論難している。その論難にシャーンタラクシタ、カマラシーラ両師弟は、仏教論理学派のディグナーガ、ダルマキールティのアポーハ論といわれる仏教の言語理論、概念論を活用し、実体、普遍、特殊などを実在として立てる必要はなく、縁起なる仏教説が正当に樹立されることを論じるのである。この経緯を明らかにし、アポーハの伝承とその意義の解明を目的とするものである。

序論 アポーハ論研究史における śabdārthaparikṣā の位置

1 章 śabdārthaparikṣā (ŚAP) の構成とその概要

- 1.1 シノプシス
- 1.2 総説部分
- 1.3 語の表示対象に関する5つの説とその批判
- 1.4 *Vākyapadīya* から引用される7つの説
- 1.5 *vivakṣā* 説
- 1.6 *apoha* 説に対する批判とその排斥

2 章 ŚAP におけるシャーンタラクシタ・カマラシーラのアポーハ論活用

- 2.1 ŚAPにおけるダルマキールティの影響
- 2.2 ŚAPにおける *adhyavasāya* 等の用例
- 2.3 *adhyavasāya* と *samāropa*
- 2.4 ŚAPにおける‘語にもとづく知’
- 2.5 ŚAPにおける実在と認識の確定要件
- 3章 ŚAPにおける対論者の問題
 - 3.1 総説部分における問題
 - 3.2 ŚAPにおける非存在―クマーリラの *abhāva* を中心として―
- 4章 TSPにおける経証（聖典活用）と ŚAP
 - 4.1 TSPにおける *Bhavasamkrāntisūtra* と ŚAP
 - 4.2 TSPにおける *Śālistambasūtra*

副論 TS 第 16 章 śabdārthaparīkṣā の全訳

序論においては、これまでのアポーハ論に関する研究史をまとめている。仏教のアポーハ論は、まずディグナーガにより先鞭がつけられるが、その後、ダルマキールティにより、外教の論難を論駁し得るものとして、より精密な理論の構築がなされる。この両者のアポーハ論を継承するのが、シャーンタラクシタ、カマラシーラである。他にも仏教論理学派には、ダルモッタラ、プラジュニャーカラグプタ、ラトナーカラシャーンティ、ジュニャーナシュリーミトラ、ラトナキールティ、などがアポーハ論を継承、発展させた。これらの諸論師の思想傾向の点から、近年、海外及び日本人学者により、分類がなされ、アポーハ論の本質が解明されてきた今にいたる研究史を要約している。

第一章では、まず第 16 章、アポーハ論の考察章の梗概を示し、その章の構成を明らかにしている。バルトリハリの学説が扱われる部分の論議の構成、第 16 章の主要部分を占めるバーマハ、クマーリラ、ウッディヨータカラとの論議がそれぞれの論師の仏教批判とそれに対しシャーンタラクシタ、カマラシーラが、弁明する部分とを対比し、前主張、後主張として明瞭に表している。このことにより、論議の争点を明確にし、シャーンタラクシタ、カマラシーラがアポーハ論を駆使する際、ディグナーガ、ダルマキールティの学説をどう活用しているかを、両論師のテキストの上に跡付け、究明している。

第二章では、シャーンタラクシタ、カマラシーラによるアポーハ論の活用として、特にダルマキールティからの影響をダルマキールティ自身のテキストの上に跡付けている。それには、自相でないものを自相と判断する *adhyavasāya* に注目し、増益(*samāropa*)との関係を調査し、アポーハ論の意義を明らかにしている。

第三章では、ダルマキールティ、シャーンタラクシタ、カマラシーラにとって

の最大の論敵ともいえるミーマーンサー学派のクマーリラのシュローカバールティカにおけるディグナーガのアポーハ論への批判が TS, TSP で大々的に取り上げられ、クマーリラの見解の特徴を示すと共に、それに対する弁明が、仏教側からどう構築されるかを究明している。また肯定語義論者(Vidhiśabdārthavādin) とはヴァイシェーシカ学派に加えてクマーリラ、ウッディヨータカラ、バーマハらの実在論者をも指示することを明らかにしている。

第四章では、アポーハ論は、単に論理的考察のみの問題ではなく、仏教の経典『転有経』の言葉からも、その妥当性が表されていることを明らかにし、アポーハ論は論理としても、教証としてもその正当性が立証され得ることを論じている。

副論として *Tattvasaṃgraha* (TS) (真実綱要) 第 16 章、言葉の対象の考察(śabdārthaparīkṣā)章を弟子のカマラシーラによるその注釈 *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) と共に全訳を施している。

〔2〕 審査結果の要旨

藤井論文が扱うところの *Tattvasaṃgraha* (TS)とは、インド古代からの伝統に基づき、主に紀元後に起こった諸哲学の体系と思想を仏教の論理学、認識論の観点から批判的に精査し仏教学説の正当性の立証を内容とする諸哲学の真実(tattva)綱要(saṃgraha)書と呼ばれるものである。全体は、サンスクリット原典で 26 章(チベット語訳では 31 章)からなる大部な書である。漢訳は存在しない。そのうち、第 16 章、言葉の対象の考察(śabdārthaparīkṣā)章を扱い、その章全体の邦訳を基に、分析を行ったものである。その章はインド大乘仏教の中観派の巨匠、シャーンタラクシタ(ca.725-788)による第 867 偈から 1212 偈の計 346 偈に及ぶものであり、さらに弟子のカマラシーラ(ca.740-795)が、それぞれの偈に注釈(pañjikā)(TSP)を施したものである。

この TS, TSP において、シャーンタラクシタ、カマラシーラ両師弟が、外教による仏教批判を退けるのに際し、仏教論理学派のディグナーガ(ca.480-540)、ダルマキールティ(ca.600-660)のアポーハ論を活用していることを見出し、その理論の本質を究明する方法として、第 16 章の全訳を目指したことは、適切なことであつた。

アポーハ論とは、仏教の因果論を分析的に解明し外教の普遍実在論者からの批判に答える言語理論とでもいふべきもので、その理論の考案者といひ得るであろうディグナーガは『集量論』第五章で、例えば「牛」という言葉は外界に実在する普遍を表すのではなく、概念としての普遍を表し、それ以外のもの、すなわち「非牛」の否定を表すと論じた。したがって、アポーハ論とは他の排除(anyāpoha)を意味するのである。

1. まず、藤井論文が、第 16 章を解説するに当たり、TS, TSP の序章における、注釈者カマラシーラによるその章の骨子を示す部分に注目したことは、的を射たことである。この第 16 章の論述目的は藤井論文のあげる TSP 序章の訳に基づけば、勝論学派や正理学派といわれる仏教以外の諸哲学学派では、実体(*dravya*)、普遍、特殊などの六つの範疇を實在として立て、この世界を解明しようとする。それに対して仏教学説では、そういったものは實在とはいえず、物質的なもの(色)、精神的なもの(受、想、行、識)以外は存在せず、この世界の諸存在は縁起によって成立するとの見解に立つ。他方、外教は実体などが存在しなければ、縁起(*pratityasamutpāda*)が言葉と概念知との対象(*śabdapratyayaḥ gocarāḥ*)として合理的に説明され得るのか、言葉と概念知とは機能し得るのかとの詰問を向ける。それに対し、仏教側は、それら実体が存在しなくとも、効力(*arthakriyā*)という点から諸存在は区別され、また言葉と概念知の対象として、諸存在は相互に排除され、区別が成立し、外界と想定されるものが、映像(*pratibimba*)としての言葉の対象として存在する故、この世界の成立(縁起)を解明し得ること、すなわち仏教学説の正当性を論じ得るものとする。これは、最高の真実からすれば、言葉の対象はあり得ないが、世俗的な意味としては、言葉の対象は、間接的に外なる世界、實在(*vastu*)と関係をもち、有効な効力を果たし得る。この言語活動は、最高の真実に導き入れるためのものである、ということの裏付けを世尊の『転有経』の言明に求め、論理としても教証としても、アポーハ論により縁起が正当に証明され得ることを表すのが第 16 章の目的である。このことが、序章の解説から知られる。これは仏教におけるアポーハ論の位置付けを表すものとして、そこに注目したことは適切であった。

以上の序章に述べられることは、第 16 章の骨子を表している故、このことをその章全体の訳出、分析にさらに有効に活かす必要があったと思われる。そうすることにより、著述目的を意識することで、論文の全体的な構成を整え、また訳出と分析の精度をより上げることができたと考えられる。このことから、アポーハ論とは因果関係の整合性を説明する機能を有するという点をより明確にし得たといえよう。訳出された 1035 偈及びその注釈の例からすれば、眼、対象、光、注意力から単一な結果として対象に対する視覚(眼識)が起こる、この点に一層注目すれば、単一な結果に対して、多様な原因が同一の結果に作用するわけであるから、その際の多様な原因は、それぞれ別個ではなく、区別なく単一とされ、因と果とが整合する点をアポーハ論が説明する機能を担っていることを一層、明らかにしえたと思われる。このことから、TS 26 章のうち第 16 章の占める位置も一層明らかにし得たであろう。また、上の TS1035 偈の内容は PVSV (量評釈自注)からのものとして藤井論文の指摘するダルマキールティからの影響の中に加えるものである。

2. この TS 第 16 章は、外教の巨匠、そこに取り上げられる代表的な論師にミーマーンサー学派のクマーリラ(ca.600-660)、ニヤーヤ学派のウッディヨータカラ(ca.550-610)、文典派バーマハ(ca.580-640)、言語哲学者バルトリハリ(ca.450-510)

とがあり、それら諸論師との対論を取り上げ解明している。前三論師は、アポーハ論を直接批判している。取り分け、クマーリラ、ウッディヨータカラからのアポーハ論批判にシャーンタラクシタとカマラシーラとが、ディグナーガ、ダルマキールティのアポーハ論を活用し答論をする部分は、910 偈から 1212 偈の 300 偈以上に及ぶもので、第 16 章の大部分である。この章の全訳と分析的研究を遂行するには、仏教のディグナーガ、ダルマキールティのアポーハ論に通じるだけでも、容易なことではないが、まして外教の諸論師の哲学とアポーハ論批判に通じることは、なお一層、困難といえる。しかし、藤井論文は、それら諸論師との議論が、アポーハ論批判を表す前主張と、それに対してシャーンタラクシタとカマラシーラとが弁明する後主張とに明確に区分して表し、その論議の応酬を明らかにしている。これは、藤井論文の、その章のシノプシス、全訳とその分析とから知られることであり、この研究成果なくしては、十分に詳細が知られなかった。なぜなら、クマーリラのシュローカヴァールティカにおけるアポーハ論批判が TS に取り上げられることは、これまでに知られていたが、しかし、それに対して、仏教の側からシャーンタラクシタとカマラシーラとが、どう答えているかは、詳細に渡って十分に知られていなかったからである。クマーリラは、仏教のアポーハ論は、非実在(avastutva)を表すのみで、区別が成立せず、すべては同義語(paryāya)となり、推論の要因である理解されるものと理解させるものとの関係(gamyagamakatva)が成立しないと論難するのである(ŚV108=TS964)。これに答えない限り、当時の時代背景からして証明を欠く主張のみでは、正当な立論と認められないことになる故、仏教学説の正当性を証明するためにも是非とも答える必要に迫られていた。仏教側は、1. にも示した通り、仏教の縁起、因果論は、アポーハ論により、原因と結果との、それぞれにおける同一性と区別(別異性)との整合性(遍充関係)は説明される故、外教の哲学における実在論に基づく普遍や特殊は必要ではなく、概念に基づく区別が成立すると答えるのである。この彼らの弁明としての理論は、ディグナーガ、ダルマキールティのアポーハ論に基づいている。このことは、藤井論文が指摘するところであるが、さらに、理解されるものと理解させるものとの関係は、勝義としては実在性は成立しなくとも、世俗としては、映像(pratibimba)を自体とし外界のものとして迷乱により判断されるとシャーンタラクシタにより答えられている(TS1088)。このことの解明として、ダルマキールティの PVIII-83 における自相でないものを自相と判断すること(adhyavasāya)に注目している点は勝れているが、さらに、シャーンタラクシタの二諦説によるアポーハ論の活用を見て取る必要がある。また、他にもダルマキールティの著作 *Hetubindu* (論理一滴)を精査し十分に指摘することも必要であったと思われる。

3. ウッディヨータカラによるアポーハ論批判(TS 982-1000)は、「すべて(sarva)」に関してアポーハは存在しないというものである。なぜなら「すべてに非ざるものの否定」とは部分の否定となるが、仏教徒にとり、「すべて」は部分からなる故、部分を否定すれば、「すべて」も成立しなくなるという矛盾をもつというのが、

ウッディヨータカラによる批判の主旨である。この批判は「すべてのものは無我である」(TS 1186)と主張する仏教学説を論難するものである、それに対し、外界の存在の無我（部分的な無我）という迷乱を否定するのであって、したがってすべてのものの無我は揺るがないという意味の答論をシャーントラクシタは表している(TS 1187)。これは、藤井氏による訳出から論議の展開を知り得るのであるが、さらに、それは、唯識派の部分的な空、余ったもの、を迷乱とするという論難を込めた中観派、シャーントラクシタの答弁であること及び、そこでのウッディヨータカラによるアポーハ論批判そのものは *Nyāyavārttika ad Nyāyasūtra* 2-2-66 に見出されることを指摘する必要があったと思われる。

しかしながら、これらの指摘は、何れも藤井論文の全訳を前にして、いい得ることであって、この全訳がなければ、これらを指摘することすらできないともいえる。また誤訳と思われる点、分析の及んでいない点も見られると共に、十年以上に渡って継続してきた成果であるため、かえって全体的な統一を欠く面もあり、欠点はないとはいえないが、なおそれ以上に本論文に示されたインド諸哲学学派との議論を通じ仏教学説の正当性をアポーハ論により論じる TS16 章の、邦訳としては初めての全訳と、その分析に基づく成果は、この分野の研究に貢献すると認められる。よって本論文は博士（文学）の学位に足るものと評価される。